

オーディオの総合月刊誌 ステレオ

Stereo

2017

2

February

音楽之友社創立75周年

75th
Anniversary

巻末
綴じ込み
付録

全国オーディオショップ便利帳
あなたの目的の店はここだ!

特集

名演奏・優秀録音盤が勢揃い!!
本誌執筆陣が選んだ
「2016年のベスト5ディスク」

特別
企画

国産新電源システムを聴き比べ
アキュフェーズ&ラックスマン

石田・藤岡対談「オーディオ組合せの秘訣」
自作スピーカーコンテスト結果発表



ノルウェーのエレクトロニクス・ブランドとして独自のポジションを有するヘーゲルから、ユニークなモデル名を持つCD専用プレーヤーが発売された。MOHICAN II モヒカン。同社にとって最後のCDプレーヤーという意味が含まれているという。旧CDP 4 Aの後を担うモデルではあるが、それとはコンセプトの点でも若干の相違があるようだ。これまでの全てを注ぎ込んだという文字通りの集大成モデルに期待されるものは大きい。

複数のフォーマットに対応することで生じる影響を除外
アップサンプリングは行なわずネイティブで変換する

モデル・ネームのモヒカンは、映画化もされたジームズ・フェニモア・クーパーの小説「ラスト・オブ・モヒカン」に因んだものだという。つまり最後のCDプレーヤーということである。もともとモヒカン族は絶滅したわけではなく、ウイスコンシン州でいまでも健在だそうだが。

S P E C

周波数特性 ● 0Hz~50kHz 出力シグナルレベル ● 2.6V RMS (0dBFS)
アナログ出力 ● アンバランス×1系統 / バランス×1系統
デジタル出力 ● 75Ω BNC×1系統
ノイズフロア ● -145dB 出力インピーダンス ● バランス:44Ω、アンバランス:22Ω
歪率 ● 0.0015%以下 外形寸法 ● W430×H100×D290mm 重量 ● 6.5kg
問い合わせ先 ● 絨エレクトリ Tel.03-3530-6276



これまでの全てを注ぎ込んだ
CDプレーヤーの集大成

あえてCDに特化し、残された課題を
極めた究極のプレーヤー

文 ● 井上千岳 Chitake Inoue | Photo ● Y.Kawamura

それはともかく「最後の」とわざわざ銘打ったのには、少々深い意味がありそうだ。そもそもヘーゲル社で

can

A変換が行なわれる。現在では異例の構成である。また電源部もHD30同様ということである。

それはともかく「最後の」とわざわざ銘打ったのには、少々深い意味がありそうだ。そもそもヘーゲル社では、マルチソースのデジタル・プレーヤーを認めていない。SACDやPC、ネットワークなど複数のフォーマットに対応することによって、コストがかさむばかりでなく音質にも重大な影響があるという。だからプレーヤーとしてはCDに限り、他のソースはDAコンバーターで対応する。CDにはまだ残されたものが多く、それを極めることで高度な音質を得ることが可能だという。いわば究極のCDプレーヤーという意味が、そこに込められている。

別の面から見れば、現実問題としてドライブ・メカニズムの供給がある。CD専用メカはもうほとんど作られなくなっていて、CD・ROM用メカなどを転用しているのが実状である。そういった制約から、これ以上CD専用機の生産は無理ということでもある。

いずれにしてもここには、同社が1997年に発表した初代機以来のあらゆる技術やノウハウが注ぎ込まれているのも確かである。「最後の」というのは、集大成という意味でもあるわけだ。

ドライブにはサンヨー製CDドラ

ヘーゲル Mohican

真空管式プリアンプ
¥500,000

イブメカを採用し、独自にカスタム化を行なって搭載している。オリジナルのサーボ回路によって読み取り精度を向上させたほか、サウンドエンジンと呼ぶ特許技術でジッターを測定限界以下にまで減少させているという。

因みにサウンドエンジンは本来アンプ技術で、フィードフォワードを駆使してA級とA級動作の利点を組み合わせた同社固有の技術である。本機ではこれをデジタル回路に応用して、位相ノイズを抑制している。

DACチップには旭化成エレクトロニクス製AKM4490を搭載している。これ以降のアナログステージも含めてDAコンバーターHD30と同じだが、本機ではアップサンプリングを行わず44.1kHz 16ビットのCDネイティブの状態

A変換が行なわれる。現在では異例の構成である。また電源部もHD30同様ということである。

**潤色がるでない
しかし情報量は大変豊富な
空前のサウンド**

余分な響きやにじみ、濁りなどがほとんど全くと言っていいほど感じられない。実に澄み切って立ち上がり速い音調で、レスポンスもまた非常に広いレンジにわたって均一だ。ピアノのタッチの切れのいいことは無類とも言えそうで、それでいて歪みが皆無に近いため鋭くはあっても刺々しさや硬質感はない。バロックもヴァイオリンやチェンバロを始めとする古楽器の音色が、たつぷりと艶やかで粘り強く描き出されている。潤色というものがまるでない。ウソがないということ、しかし情報量は大変豊富である。

オーケストラは伸び伸びとして、ある意味ではクールでスマートに徹した出方である。緻密で正確。ダイナミズムの大きさもソースそのままという雰囲気だ。ジャズではさらに起伏が強く、メリハリを利かせながら何の歪みも濁りも生じない。これほど徹底した精密さは、確かに空前とも言えそうである。

リアパネル



試聴ソフト

- ▶『J.S.バッハ ヴァイオリン、オーボエと
弦楽合奏のための二重協奏曲二短調』
コレギウム・アウレウム合奏団／ハルモニア・ムンディ/
KUX-3018-H
- ▶『ラ・カンパネラ〜ヴェルトウオーゾ・リスト』
辻井伸行(ピアノ)／エイベックス／AVJL-25895
- ▶『ベルリン・シュターツカペレ 78年ステレオライブ』
オトマール・スイトナー指揮、ベルリン・シュターツカペレ/
キングインターナショナル／TFMCLP-1043-4